贋金づかい

尾辻克彦

づかい

■著者略歴■

本名・赤瀬川克彦。1937年横浜市生まれ。武蔵野美術学校中退。前衛芸術家赤瀬川原平として読売アンデパンダン展などで活躍する。1979年、作家尾辻克彦として「肌ざわり」でデビュー、1981年には、父が消えた」で芥川賞を受賞。主な著書に『櫻画報大全』(青林堂、新潮文庫)、『東京ミキサー計画』(パルコ出版)、『外骨という人がいた!』(白水社)、『雪野』(文藝春秋)、『カメラが欲しい』『東京路上探険記』(新潮社)などがある。

にせがね
贋金づかい

◉著者
尾辻克彦(おつじかつひこ)

◉印刷
1988年6月15日

◉発行
1988年6月20日

◉発行者
佐藤亮一

◉発行所
株式会社新潮社
郵便番号162／東京都新宿区矢来町71
振替東京4-808
電話・業務部03(266)5111
編集部03(266)5411

◉印刷所
大日本印刷株式会社

◉製本所
大口製本株式会社

◉定価
1200円

© Katsuhiko Otsuji 1988,
Printed in Japan

乱丁・落丁本は、ご面倒ですが小社通信係宛お送り下さい。送料小社負担にてお取替えいたします。

ISBN4-10-361103-0 C0093

賃金づかい

此为试读,需要完整PDF请访问: www.ertongbook.

1

私が贋札を手にしてからもうずいぶんたつが、まだ一枚も使っていない。

私はふだん本物のお札を使っているし、それでとくに不自由もしていない。いまの仕事が面白いから働くのは嫌いではないし、それで生活するだけの収入は充分にある。だからなかなか贋札を使えない。あえて贋札を使う理由がないのである。

いやそれは理由の一つで、理由の二つ目は、やはり贋札を使うのが怖い。つかまれば重罪である。ふつうの犯罪とは違って国家に対する反逆だから、これは大変な一大事だ。

私が贋札を手にしたのは、五年ほど前のことである。贋札の一部は秘密の細工をしたバッグに入れて書斎の本棚の上に置いてあるが、あとのほとんどはD銀行の貸金庫に預けてある。

ふつう貸金庫というのは土地売買の契約書とか、高価な宝石などが、広いスペースの中にこそっと入れてあるものらしいが、私の場合、その貸金庫のスペースを無駄なくぎっしりと詰め込んで使ってあるので、何となく恥かしい。

早く使ってしまいたいとは思うのだけど、ずるずると使わずにきて、もう五年になる。毎月貸金庫の使用料だけが消えていくのは、何だか中の贋札が本物に少しずつ変化していくような気がしないでもない。

私が贋札をもつことになったのは、荒玉氏から手渡されたのがきっかけである。荒玉氏は文芸書を出版している豪文社の人である。純文学の月刊誌「豪文」の編集次長の地位にいるらしい。

荒玉氏にはじめて会ったのは授賞式の会場だった。その年私は中央公論新人賞をもらった。いわゆる純文学の新人賞である。

それまでにもエッセイのようなものは書いていたが、何か自分に抵抗感がほしくなった。何を書いても許容されるエッセイのようなものではなくて、小説という定型の中で文章をはびこらせてみたかったのだ。

たとえば四角いメロンというか。

メロンというのはふつうはつつがなく丸く生長するものだけど、四角いカプセルをかぶせておくと、その中でメロンは四角く生長する。四角いスペースの隅々までくまなく果肉をみなぎらせる。カプセルに少しのヒビでもあれば、その細い隙間を点検でもするようにメロンの末端がみなぎっていく。

つまりこの世でそんな濃密な作業をしたかったのだ。

それを実行に移してみると、予感した通りに文章の内部空間がひろがった。つつがなく丸く育てる場合、果肉は放射状に伸びるだけだが、小説というカプセルをかぶせると、その限定されたスペースをくまなく探索しながら、文章の回路がむしろ複雑に伸びひろがっていく。仮りにその回路の一本を引き出してみると、丸いメロンの中の放射状に伸びた線条よりもはるかに長い、海底にからまった釣糸のようなものが目の前にあらわれてくる。

そんな奇蹟のような作業が面白くて小説を書いてみたら、それが新人賞を受けてしまった。

これは意外な出来ごとだった。私も、回りの友人たちも、

「まさか」

というような、段違いの道路を踏み外した感覚をもった。

長い大根とか蕗などから長い繊維が出てくるのはわかる。ところがメロンから、それもふとした気紛れで四角くしたメロンからこんなに長い線条が収穫できるものかと、新しい品種改良の実験結果に興味を示す農民の面持が、世間にあふれた。そんな農民の収穫祭とでもいったような授賞式の会場で、私はいろんな人に会釈していた。

床は柔らかい絨緞である。東京の、皇居に近いビルの中の大ホールだった。私にははじめての世界なので物珍しくもあった。きちんとスーツを着た人たちが、みんな水割りのグラスを持って、広い会場を右往左往していた。おそらく文壇やこの業界の人たちだろうと思われたが、その間に立って、あちこちに、長い裾のドレスを着て濃い化粧の婦人たちがいるのが不思議だった。はじめの印象としては、

(妙なことをする)

と思ったのである。だけどその全体の配置を見ながら、

(なるほど、これはホステス……)

とわかった。本来は銀座のバーやクラブのホステスである人たちが、この授賞式の会場のホステスをしにきているのである。世の中の意外な関係を見た感じだった。中の一人が私の愛人のようにして、水割りのグラスを持ってきてくれた。

会場の中央にはいろんなご馳走を並べた大きなテーブルがあるのだけど、この授賞式の当事者である私はなかなかそこまで歩いて行けなかった。こんなとき食べ物になど関心をもってはいけないような気もするし、つぎからつぎへと人の紹介があるので動けない。この賞を出している出版社の

担当編集者は美空さんといった。その人がつぎつぎに業界の人を引き合わせてくれる。私はそのたびに、

「あ、そうですか」

とか、

「いや、そうでもありません」

とか言って会釈をするのである。

会釈のパターンに当てはめて自分の顔の表情を作り、言葉を選び出すというのは、見た感じよりも疲労度の激しいものである。しかし人間にしろ犬や猫にしても、生きものには注目され脚光を浴びることの喜びがある。それによって疲労度がプラスマイナス相殺されるわけで、その喜びがなかったらみんな大変なことになるだろう。対人恐怖の一度に重なる電圧で、頭の電極が吹っ飛んでしまうだろうと思うのである。

会場には著名人の顔がときどき見える。あ、あの人が野坂昭如……あ、なるほど、吉行淳之介……、え、この人が丸谷才一……、というような、世の中のメディアの濃縮液の中にいる感じがあった。その人々は顔を見てすぐにわかるのだけど、顔でわからない人々は出版社の編集や営業にたずさわっているようで、たくさんの名刺をもらった。つぎつぎと手渡されて、Aの関係のBの立場にいてCの仕事をしているというようなことを説明されるのだけど、それが何人も重なると全部がこんがらがってわからなくなる。何枚もの白い名刺の系統が互いに伸びて入り乱れて一枚の巨大なタタミイワシのようになってしまうのは、私が律義に考えすぎるからなのだろう。

立ったままあれこれと会釈をしているうちに、グラスが空になっている。すぐ脇からホステスの白い腕が伸びて、また新しい水割りのグラスを差し出された。はじめにグラスをくれた私の愛人の

ようなホステスである。白い腕をたどっていくと、全身がその白い腕のつづきなので驚いた。私は慌ててその裸身から手を離したが、あまりにも大胆である。乳房がそのまま見えるのはまだしも、それを降りていった腰の中央部の黒髪まで見えるので、さすがに目をそらした。しかしそらした視線は、別のところをくるりと回っただけでまた戻る。そのホステスはグラスを渡すと背中を向けて、私の視線を引きずりながらすうっと離れていった。そんなことも私には物珍しく、受取った水割りを一口飲んだ。

また一人紹介されて、にこやかな顔が近づいてきた。美空さんが何か私に名前を伝えてくれたが、まあそんなことはともかく、という感じでその人は名刺をバトンタッチのバトンのように差し出して近づきながら、

「いやあ尾辻さん。本当。素晴しいです。おめでとう」

と笑顔を崩さずに私を見つめている。名刺には豪文社の「豪文」編集部の、

「荒玉豪」

とあって、凄い名刺だと思った。名前が凄い。顔を上げるとその人は寸分も笑顔を崩さずに私を見ている。私は挨拶がわりに、

「凄いお名前ですね。しかもこの豪が」

と言ってしまった。荒玉氏は笑顔のままうつむいてまた半歩近づく。

「いやいや、変な名前ですけど、ご記憶に残してもらえば、さいわいです。ぐはは」

眼鏡をかけた、往年の二枚目俳優グレゴリー・ペックのような人である。髪はやや銀色に変りはじめのところで、それにくらべて笑い声がエネルギッシュだと思った。

「しかし尾辻さんの文章は、じつに軽い。いやごめんなさい。軽いというかリズミカル。原稿用紙

の上を、何か自転車ですいっ、すいっと走り回るみたいで、素ン晴しいですよ。ドコで覚えたの。あんな文章」

言葉づかいに変に乱暴なところがある。私は妙な気になった。豪文社といえば大出版社であり、しかも文芸書のシニセだといわれている。私はこれまで絵を描いていたので文芸雑誌などまるで無縁だったが、しかしそういった出版社のネームヴァリュー、あるいはカラーといったものは何となく感知している。その豪文社の、しかも銀髪にさしかかった人であれば、もっと荘重な様子だろうと思っていたのだ。そんな先入観がぺろりとめくれて、もう一度名刺を見ながら返答をした。

「いや、ぼくは文章なんて、勝手に書いているだけですから……」

私は例によって語尾が濁っていきながら、あとは何とか時間が過ぎないかと思った。荒玉氏は、

「いやいや、尾辻さんの文章というのは、ひょいと人を騙す。尾辻さんの方が、最初から転んじゃっているでしょう。だからこちらが文章を追いながら、コロッと騙されるんだなあ」

と言っているが、これは面白い批評だと思った。転んでる、なんて面白い。

「あのう、とぼけてるってことですか」

「いやいや、そおんなことじゃありません。つまり何ていうか、リズミカル、な文章で、その文章が内容としては当り前なんですけど、その当り前っていうのが、もうこれは怪しいことで、いやいや、何かぜんぜんとりとめのない批評で、ごめんなさい」

「いえ、ぼくもそう思います。というと変だけれど」

「いやあ変じゃないです。そう率直におっしゃるところに、もうこれは騙しごとが組み込まれているわけで、何しろ贋札作った人だからなあ。ぐははは」

荒玉氏はまたエネルギッシュに笑いながら回りを見た。あいかわらずみんな、スーツを着て水割

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.

りを持った人々が会場にどよめいていて、ロングドレスのホステスたちが、何かサービスでもすることはないかと揺れ動いている。さっきの裸の愛人を目で追ったが見当らない。一人肌色に光るチャイナドレスを着た女がいて、これもはじめは全裸かと思った。体の線がそのままドレスにむき出しになっている。ところがそのドレスに何故かパンティの線が一本だけ浮いて見える。つまり臀部の右側にだけ見えて左側にその線が見えないのが不思議だった。他にもそれを目ざとく見つけた人がいて、軽く弾んだ声をかけると、チャイナドレスの女はその裾をひゃっと背中までめくり上げた。色がほとんど同じなので、皮膚がそのままめくれたような気がした。そこにはっきり見えたパンティはやはり右側だけで、左側は細い紐だけがウエストラインで輪になっている。そういうファッションパンティがあるのだろう。そう思ったところをまた肌色の光るドレスの生地がするりと降りて、チャイナドレスの女は消えていった。人々はみんな変らずに談笑していて、ときどき横切る人をちらりと見たりしながら、あちこちで水割りのグラスが揺れている。その様子はぜんぜん変らない。荒玉氏が回りを見たのは「贋札」という言葉が誰かの耳に挟まったかどうか、ちょっと気にしたのだろう。

私は以前千円札を印刷したことがある。このことについては、いずれちゃんと小説に書くつもりでいる。真剣に重い気持で絵を描いていたころのことだ。美術の理念に先回りして、印刷絵画ともいうべき紙幣という物品の、その模型を作ったのだ。だから贋札とは少しばかり異なる。これは当時警視庁に押収されて新聞記事になり、裁判も長くおこなわれた。だからこの会場にも知っている人がいるだろうと身構えてはいた。でも考えたらここは世界が違うのだから、まず関心はないだろうし、その話題が出ることもないと思った。それが目の前の人の簡単な一言に露出したので、私もちょっと戸惑ったのだ。

「いや、ぼか尾辻さんにですね、ぜひまた贋札を使ってほしい。いやいやこれは冗談ではなくて、真剣な話」
荒玉さんの声である。いきなり凄いことを言うと思った。しかしちょっと話が違う。
「あのう、またっていうけど、ぼくは贋札を、使ってはいないですよ。千円札の模型というのを印刷したことはありますけど」
「いや、いやあわるかった。ごめんなさい。わかってます。またじゃない。またじゃないけどですねえ、しかし尾辻さん、もちろん尾辻さんに贋札を作ってほしいとは思います。それは本当にそう思う。でもそれはそれとして、いや、まずいなまた、こんな大問題をそれはそれとしてなんて」
ちょっと水割りのウイスキーが回ってきたのかなと思った。荒玉さんの顔は赤くなっている。
私もアルコールは回っていた。やはりこの授賞式の当事者で緊張している。だからグラスが口に何度も近づく。
「尾辻さん、そうだ。やはり見てもらおう。ちょっとね、紹介したいものが……」
荒玉氏が言った。誰か業界の人にでも引き合わせるのだろうか。
ちょうど係の人がいなかった。担当者の美空さんもやはり水割りを飲んでいて、それに他人事とはいえ雰囲気は晴舞台だから、どうしても上機嫌になるのである。どこか人の流れにまぎれて見当らない。
「尾辻さん、ちょっと」
荒玉氏はもう歩き出しているので、私は後について行った。荒玉氏は私の仕事の過去のものにも興味を持っているらしい。だけど私はこの荒玉氏のことをぜんぜん知らない。そもそもこういった授賞式の構造というのが、私にはまだはっきりとわからない。来ているのはみんな関係者なのだが、

どういう関係なのか。ここにいる人々がみんなコンピューターのコードや端子みたいになってこの業界を動かしているのだろうが、その配線図というのはどこにあるのだろうか。

「あ」

とか言って、群衆の中から視線が飛んできて、すでに何かの雑誌のインタビューで会った人の顔が挨拶したりする。挨拶というより、移動する途中でのことなので合図というか、それにこちらも、

「あ」

と言って合図を返したりする。だいたいは目で返すのだけど、それが目だけでは伝わらずに顎の先を合図に加えたり、さらに指先を加えたりする。

そうやって人々の中を掻き分けながら、絨毯が固いタイルに変って、会場の外のトイレに着いた。あれあれ、と思った。こんなところで人に紹介、ということでもないだろう。ちょっと歩きすぎてしまったのか。ヒンヤリと白い便器が並んでいる。少し排出したかったことも事実ではあるが。

「いや、トイレに来ちゃった。ちょっと、じゃあ小便しちゃいましょう。尾辻さんもどう？　どうってのもおかしいか。ぐはははは」

妙なタイミングで荒玉氏は便器に向かった。私もそうなった以上便器に向かおうとしたが、警戒心がちょっとだけふくらんでくる。すぐそばに華やかな喧騒の空間があり、そこをちょっと外れて無人の便所。この静けさが何か怪しいと、いつも思う。前にこれと同じ空間での恐怖体験がある。

それは新宿三丁目の、地下鉄の便所だった。御苑寄りの改札口のそばである。新宿寄りの方は賑やかだけど、こちらはぐっと人通りが少ない。だから便所も静かで、それが妙なことに、手前に婦人用があって奥の方に紳士用がある。しかしふつうは婦人用が奥ではなかったかな、のぞかれないために。と思って静かな婦人用の前を通り過ぎ、なおも一段と静かな紳士用の方にふっとはいると、

そこが満員だったのだ。
ギョッとした。
しかし便所が満員というのはよくあることだ。別におかしくはない。
私は仕方なく鏡の前に立つふりをしながら、しかしどうにもちぐはぐだった。十基ほどある紳士用便器がみんな紳士でふさがっている。満員と静けさとのアンバランス。
そのうちその一人がフッと離れて鏡の方へ来たので、私は、
(空いたな)
と思ってそこに向かった。向かいながらもアンバランスな緊張は高まるばかりで、一つだけ空いた便器の前に来て、手にした荷物を上の棚に置いて、自分のファスナーを降ろし、
(さて)
と体勢をととのえたところでハッと気づいたのだ。
(水が出ていない)
水とは尿のことである。全員の人体から尿が出ていない。まるで無音の状態なのに、全員の手がそこに触れて、しかもわずかに揺れ動いている。
(あっ)
と思った。体が途中で固まった。巨大な鼠が十匹、息を殺しているみたいで、しかも殺された息だけが充満している。
私はゆっくりと、降ろしたばかりのファスナーを、そのまま、ことを終えたように上に戻した。慌ててはいけないと思い、ごくふつうに荷物を持って、ぎっちりとした足取りで出口に向かった。異物としての私は、さいわいその場の意識にはとまらなかったようで、全員が右手の揺れ動きに熱

中している。十人ほど横一列の男たちには高まりの波があり、その頂点に向かったものは天を仰ぎ、他のものはみんなその男に注目しながら、その勢いに自分もあやかろうと振動を合わせている。

一人離れてきていた鏡の前の男は、そこで髪をなおすふりをしつづけていた。私もごく当り前の歩調によって、何ごともなくそこを通り抜けた。その男はきっと、私が空けた便器にまた戻るのだろう。

外に出ると改札口があり、切符売場があって、人々が通行している。駅員が鋏をカチン、カチンともてあそんでいる。そこから一歩はいった空間に、ひっそりと音もなく蠢動する男たちの横棒があるとは、思いもよらないことだった。

私はそんな記憶をほどいて、そうっとまた包みなおしながら、ファスナーを戻した。

「いやあ、尾辻さんと連れションをするとは思わなかった。ぐははは」

荒玉氏はすでに鏡の前に行って、手を洗っている。私もそこへ行って、指先を儀式的にちょっと洗った。

「人間てのは変なもんだねえ。いちおう洗浄の儀式というものがある」

ぐっと詰まった。考えたことを荒玉氏に言われてしまった。仕方なく顔半面で薄く笑いながら、ペーパータオルを使っていると、

「尾辻さん、これです。ちょうっと見て下さい。これ」

荒玉氏が内ポケットの財布を取り出し、中から千円札を一枚抜いた。私はペーパータオルを丸めて、屑入れにカサリと捨てた。

「どうですか。贋札の専門家としては」

荒玉氏は冗談を交じえて言っているつもりが、あまり冗談にならない。私は体半分緊張して、そ

の手にするものを見た。
「これは凄いものですよ」
言われて見るとたしかに千円札である。私たちはちょうどトイレのトップライトの下にいて、そこに千円札がはっきりと浮かび出ている。伊藤博文の像がある。この肖像はホクロが特徴だ。背広のバッジも特徴だ。分厚い議員バッジで、しかもその背広の襟が二重になっているようなのは、フロックコートか何かの形式だろうが、いつも妙な襟だと思っていたのだ。肖像の飾り枠には桜がある。左の方には菊がある。さらに左の空白にはスカシの像が、わずかな紙の盛り上がりの型押しみたいになっていて、それはどう見てもふつうの千円札である。
「これはしかし、千円札でしょう」
そう言って私は荒玉氏を見た。そう言われて荒玉氏は嬉しそうにニヤリと笑う。
「いやあ、名人にもわからないか。いやいや、ごめんなさい。しかしね、尾辻さん」
さっきからのことであるが、荒玉氏はわりにせっかちな口調なので、私のオッジという発音がオツイと聞えてしまう。
「オツイさん、じつはこれ、贋札なんです」
私はまず本気にする気持はなかった。こういう場所でこういう立場の人が、そういう物件を持ち出したりするはずがない。それにどう見てもちゃんとふつうの千円札だ。お札の観察では私はふつうの人より長けている。お札というのは人々の無意識の視線の下を通過するものだけど、私の場合、そのことをめぐって警視庁、検察庁、裁判所と通り抜けてきたのだから、ふだんからお札に注目する習慣ができている。だからもし贋札を手にしたらすぐに指摘できると思う。
「オツイさん、印刷、そっくりでしょう」

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.